## 《紫の上の死①》

秋を待ち受けて、（ようやく）世の中が少し涼しくなってからは、
秋待ちつけて、世の中少し涼しくなりては、

（紫の上の）御気分も少しは爽やかになるようであるが、
御心地もいささかさはやぐやうなれど、

やはり、ややもすると病状が悪化することがある。
なほともすればかごとがまし。

それというのも、身にしみるほどにお感じになられそうな秋風ではないけれど、
さるは、身にしむばかり思さるべき秋風ならねど、

涙にくれがちな日々をお過ごしなさる。
露（つゆ）けき折がちにて過ぐし給ふ。

## 《紫の上の死②》

（紫の上は）中宮が（宮中へ）帰参なさろうとするのを
中宮は参り給ひなむとするを、

「もうしばらくは（自分の容態を）ご覧ください」
「いましばしは御覧ぜよ。」

（中宮の行動に意見するのは）
とも（お願い）申し上げたくお思いだが、　生意気なようでもあり、
とも聞こえまほしう思せども、さかしきやうにもあり、

使者が
帝の（中宮に戻るようにとの催促を伝える）ひっきりなしに来るのも気を使うので
内裏の御使ひの隙（ひま）なきもわづらはしければ、

そのように申し上げなさらないが、
さも聞こえ給はぬに、

（病状が重く）あつら（中宮のお部屋）へもお渡りになれないので
あなたにもえ渡り給はねば、

中宮が（自ら紫の上のもとへ）御渡りになられた。
宮ぞ渡り給ひける。

## 《紫の上の死③》

本当にお会い申し上げないのも
（病床にあって）みっともない（自分の姿である）が、甲斐がないことだと思って、
かたはらいたけれど、げに見奉らぬもかひなしとて、

御座所を整えることを
こちら（の部屋）に（中宮をお迎えするための）特別にさせなさる。
こなたに御しつらひをことにせさせ給ふ。

（紫の上は）この上なく痩せ細りなさっているが、だからこそ、（かえって）
こよなう痩せ細り給へれど、かくてこそ、

上品で優美なことがこの上なくも
あてになまめかしきことの限りなさも
まさってすばらしいなぁと（感じられ）
まさりてめでたかりけれと、

## 《紫の上の死④》

過去（の若い頃）あまりにも美しさに溢れ、（美貌が）鮮やかでいらっしゃった盛りは
来し方あまりにほひ多くあざあざとおはせし盛りは、

かえってこの世の桜花の美しさにもたとえられなさったが
なかなかこの世の花の香りにもよそへられ給ひしを、

（今は）この上もなく可憐で愛らしいご様子で
限りもなくらうたげにをかしげなる御さまにて、
（死期を悟って）ほんの一時的なものとこの世を思いなさっている表情は
いとかりそめに世を思ひ給へるけしき、

たとえようもなく痛々しく、むやみにもの悲しい。
似るものなく心苦しく、すずろにもの悲し。